



平安だより

世田谷平安教会付属 平安幼稚園

2018年 11月号

「幼き日の思い出」

牧師・園長 長村亮介

「成長」

父は学者でギリシア語ができた。
五歳のとき、一度訊ねたことがある。
「なに読んでるの？」

「トロイアの攻略だよ」
「攻略ってなあに、トロイアってなあに？」

そこで

父は椅子と机を町に見立てて積み上げ、
プリアモス王のつもりで私を一番上に座らせ、
うちの猫をヘレネーと呼んだ。(父曰く)
彼女は悪党パリスの手で家から連れ去られたのだ、
この悪党、臆病なやつで足台のすぐ下あたりにひそんでいた、
だが、彼女をー彼女は世話のしがいのある、

ー トウザーやトレイ(うちの犬ども)、つまりアトレウス
哀れな猫だから
の後裔はー

トロイアを占領してから探し出そうとしたのだ、
ー 勇士アキレウス(馬小屋の私の小馬)は

拗ねていないときはいつもー 勢いよく飛び跳ねて、
へクトール(わが家の給仕の少年)を追い払おうとしたものだ。

これが私に、誰が誰で、何が何であるかを教えてくれた。
これだけのことを五歳のときに、私はちゃんと

覚えたものだ。とてつもなく嬉しかったし、
いまだに嬉しい。ーそれも賢明な教師であった父のおかげだ。

燃えさかる炎のような学習意欲を
弱い目の無知に向けさせるか、さらに悪いことには、
愚昧と空虚に甘んじさせ、弱い目を半盲状態に

してしまうよりも、父は遥かに賢明だった。

...

(ブラウニング詩集 富士川義之編)

ロバート・ブラウニングと言うと、上田敏の訳詞集「海潮音」にある「春の朝」の最終行、「すべて世は事も無し」がよく知られていると思います。この「平安だより」でも、以前に「ラビ・ベン・エズラ」から詩冒頭の「ともてに老いてゆこうじやないか! 最高の人生はまだ先にある、人生の最後、そのためにこそ最初は造られたのだから。」をご紹介したことがあります。

この「成長」は、ブラウニングの最晩年、七十七歳か亡くなる七十八歳の時に書かれたものです。その年齢になっても、五歳のときにしてくれたお父さんのお話を、これほどにはつきりと具体的に覚えてお父さんのお話を、これほどに思います。いえそれ以上に、お父さんが、幼いブラウニングにとつて身近な椅子や机、猫や犬たちを使つてトロイア戦争のお話をしてくれたことです。お父さんが高く積み上げた椅子や机の上に、王様のように座らされたブラウニングは、それはわくわくドキドキしながらお父さんのしてくれる物語を聞いたことでしょう。そのときの思いを、「とてつもなく嬉しかったし、いまだに嬉しい」とブラウニングは、彼の生涯を貫くような、最大級の喜びとしてここに記しています。

子どもたちの学習意欲、「何で、どうして」は果てしもなく続きます。でも、そのようにして子どもたちの世界は広がり、また深くなっていくのではないのでしょうか。お父さんは幼いブラウニングの目に見える世界に入つて来て、「誰が誰で、何が何であるかを教えてくれた」。そのことをブラウニングは心から感謝しています。

それとこのころに、私たちは自分の人生についてのイメージを持つのではないかと思います。ブラウニングが、その最晩年に、このお父さんとの思い出を書いているのは、先に「すごいな」と書きましたが、私の年齢になると、実は共感するところがあります。もちろん私の父はブラウニングのお父さんとは全く違いますが、誰にとつても、幼い時に可愛がって貰ったという記憶は、人生で一番幸せな、大切な時に違いはないのですから。